

# 子どもの笑いと自我の育ち そのⅠ

今 井 和 子

## Ⅰ 研究の動機

近年、子どもの笑顔や笑い声が少なくなっているのではないだろうか。私が保育士になった時の昭和40年代、0、1、2歳の混合クラスを5～6年続けて受けもったが、その時「幼い子どもはなんとよく笑うものか」という印象が強かった。大人から見れば何でもないような小さなことを、実によく笑うので、「何がおかしいの?」と口癖のように言っていたことを、記憶している。しかしここ10年ほど、いろいろな保育所で乳児保育の観察や、ビデオ撮りをしたり、多くの支援センターで幼い子どもに関わる機会をもっているが、乳児の楽しそうな笑い声をきいたり、よく笑う子どもに出会うことが少なく、そのことが大変気がかりであった。

豊かなsmileやlaughter（以後「笑い」）は、心身の健康、滑らかなコミュニケーション能力の育ちを促すばかりでなく、肯定的な自己表現や言葉の獲得にも重要な意味をもつ。と同時に子どもの自我の確立にも大きな影響をもたらすのではないかという仮説のもとに、共同研究グループをつくり、3年間継続研究を行うことにした。

## Ⅱ 研究の目的

- ① 表情の固いあまり笑わない子は増えているのかどうか？ 実態調査を行い、その原因や背景になっている事柄を明確にする。
- ② 実態調査や乳幼児の笑いの発達をもとに「豊かな笑いがなぜ子どもの自我の発達を促すか」を、明確にする。
- ③ 子どもと大人の信頼関係を回復するために、必

### 要な環境とは？

笑いは「面白いね」「楽しいね」と心を通わせてくれる相手が存在してこそ成立する。そういう意味で幼い子どもの笑いが多いか少ないかは、双方の心の通い合いがどれほど豊かにあるかを計るバロメーターでもある。さらに、子どもの笑顔は親や保育に携わる者の宝、生きる力の支えでもある。大人と子どもの関係は、大人が一方的に子どもに影響を与えるものではなく、おとなも子どもから言葉に尽くせぬ喜びや力をあたえられている。「子どもとのやりとりを楽しめる生活」こそ子どもの笑いを豊かに育む礎だと考える。子どもの生活に笑いを取り戻すことこそ、子どもと大人の関係を回復することになると考え、そのための環境のあり方を考察する。

## Ⅲ 研究の方法

「子どもの笑いと自我の育ち」に関するアンケートによる実態調査を行い、分析考察を行う。

### (1) アンケートの作成とその内容

#### ① 保護者に対してのアンケート

- a アンケート対象児（今回は0、1、2歳に絞る）
- b 対象児が生まれたときの様子
- c 親の育児に対する考え方及び方法、接し方
- d 対象児の感情表現について（具体的場面から）親が自分の子どもについて「よく笑う」「あまり笑わない」などの判断をすることは難解である。そこで保護者用のアンケートはなるべく具体的な親子のふれあいの場面を設定し（例えば、授乳、おむつ交換、泣いた時のあやし方、遊びの時など）その時々々に「どのように関わっているか?」を問い、その時

の子どもの反応はどうか？を答えてもらった  
り子どもがどのような状況や場面でよく笑う  
のか、を設問項目に入れるなどした。

- ② 保育所の保育士を対象にしたアンケート
  - a クラス規模（子どもの人数，保育士的人数）
  - b その中にあまり笑わない表情の固い子，笑い声がでないなど，気になる子がいるかどうか
  - c bの質問で「いる」と答えた子どもについて，性別，年（月）齢，おはしゃぎ反応，視線の共有，笑い声，自我のめばえと自己主張の有無を問う
  - d 笑わない子への保育者の対応について
- ③ 子育て支援センターのスタッフへのアンケート
  - a スタッフについての質問（資格の有無，経験年数，b～dについては保育所と同じ）

(2) アンケート作成時の留意点

生育過程における環境との関連性を探る。感情表出と自我の育ちとの関連を，具体的場面から分析する。

保護者（親）と保育者に「子どもの笑い」に關しての認識の違いがあるか。

保育所と子育てセンターの「子どもの笑い」に關する比較

(3) アンケート調査の実施

保育所

図1. 視覚障害者の手引き

地方	園数	保育士	保護者
北海道 東北	19	41	552
関東（除く東京）	103	184	1300
東京都内	67	70	511
四国 九州	5	17	200
計	214	354	2970

支援センター

配布したセンター数 30箇所  
 回収（協力）センター 25箇所  
 スタッフ 38名  
 保護者総数 525名

IV 結果と考察

アンケート調査の結果，今回は（1）-②保育所の保育士，及び③子育て支援センターのスタッフを対象にしたアンケート調査の一部を報告し，分析，考察を行う。

アンケートの中の設問「あなたのクラス（支援センターに通う子ども）の中に，あやしたり，ふざけたり，おはしゃぎ遊びなどしても，あまり笑わない気にかかる子どもはいますか？」

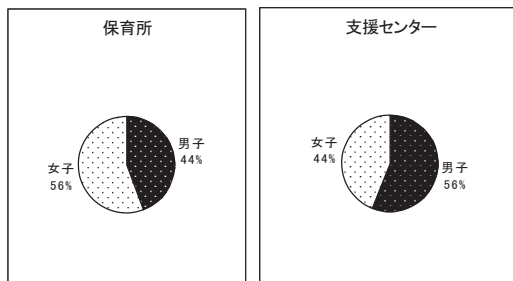
（保育所の場合・・・4月，クラス担任になった時点から考慮し，記入してもらった。全体人数はクラスの子どもの数）

笑わないと思える子どもについての実態調査

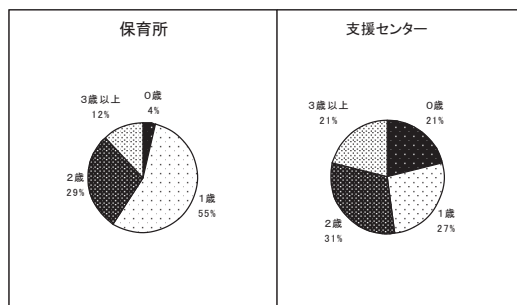
	保育所	支援センター	計
男子	78	37	115
女子	99	29	128
計	177	66	243

全体人数 2966人	6%	全体人数 525人	12.6%
------------	----	-----------	-------

【性別】



	保育所	支援センター	計
0歳	4	21	25
1歳	55	27	82
2歳	29	31	60
3歳以上	12	21	33



(支援センターの場合、通ってくる子どもは不特定のため、1日平均何人位の親子が来るか?を問い、その子どもの人数をそのセンター全体の子ども数と捉えることにする)

その結果「いる」と答えた人数は次の通りである。

〔考察〕

ア 今回の研究目的の①にあたる「笑わない子どもが増えているか?」は初めての調査でもあり、過去のものと比較することはできなかったが、例えば、保育所の場合、各年齢の入所児童総数と笑わない子の割合を出すことによって、その実態を知ることができることはほぼ可能になったと思う。

その結果は「6%」であった。

母親と異なり、保育者が他の子どもたちと比較して「笑わないと思われる子ども」を見出すことに信頼性を持ち、調査に踏み切った。例えば、家庭では笑うが、園では笑わない子、保育者と子どもの関係性、クラスの環境のありようなど厳密に考えると、数値の信頼性は不十分である。が、保育者の目で捉えた今回のアンケートの結果を見ると、かなり深刻な状況になっていると考えられる。保育者は子どものことを「このごろよく笑うようになった」などと笑いを心身の健康のパロメーターとして表現する。乳児期の笑いは未来に向けて発達が促されていくという証でもある。生後2ヵ月に表れる「社会的微笑」は人への基本的信頼が生まれ始めたことを意味するものである。乳児の重要な発達課題である「笑い」の乏しい子が保育所に6%いるということは、サイレントベビーの問題と同様、子どもからのSOS発信と受け止めねばならない。

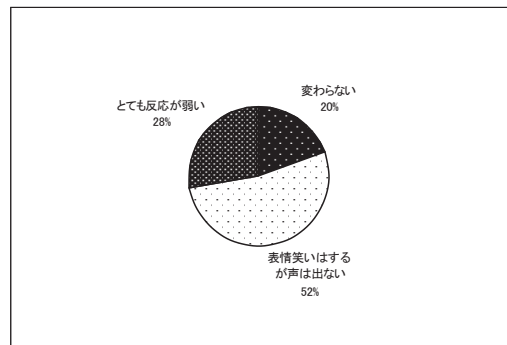
イ 園児と子育て支援センターに通う在宅の子どもの比較

支援センターでの「笑わない子ども」の数値については、センターに通う子どもが不特定のため、保育所のような割合を出すことはできなかったが、センターに1日平均何人位の親子が通ってくるか?を問い、その子どもの人数を全体数とし、笑わない子どもの割合を出してみたら、保育所と比較にならない「13%」という結果が出た。センターの場合、アンケート対象者数も少なく、保育所と比較するのは無理がある。がアンケートの結果に見

るように在宅の子どもに「笑わない子ども」が圧倒的に多いことの原因を明らかにすることは重要であろう。在宅の母親がほとんど一人で育児に携わらなければならない事態に比べ、園児は毎日いろいろな大人や子どもと関われること、すなわち、人間関係の多様さがまずその大きな要因となっていると考える。(母親の育児不安やストレスと子どもの笑いについての相関は次回で報告する)

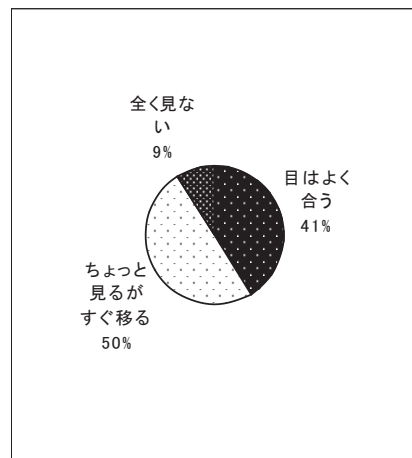
〔A-1〕 あやしたりふざけたり、色々なおはしゃぎ遊びをすると表情は変わるか

	保育園	センター
変わらない	34	16
表情笑いはするが声は出ない	92	22
とても反応が弱い	48	26



〔A-2〕 スタッフや保護者が目を見て話しかけると目は合うか

	保育園	センター
目はよく合う	72	27
ちょっと見るがすぐ移る	87	33
全く見ない	16	6

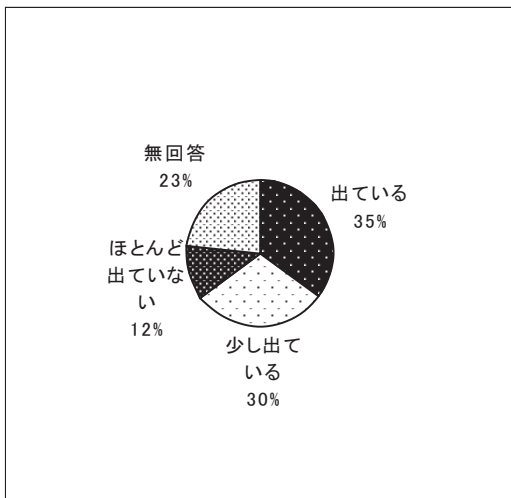


## V 「あまり笑わない子」の実態調査

ここでは保育者や支援センタースタッフが「あまり笑わないと感じた子ども」の (A) 自己表出について (B) 自我のめばえとその表しのアンケート調査を行った結果を報告する。

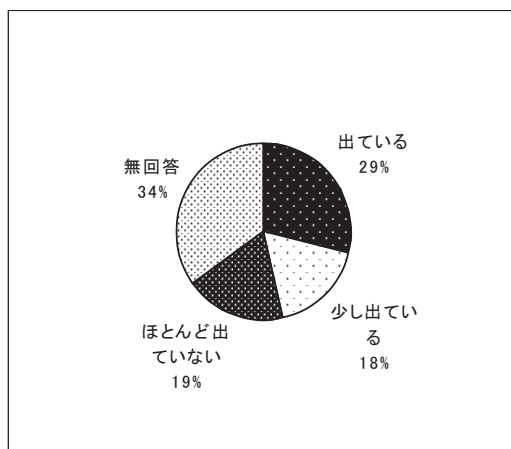
### 〔A-3〕言葉や、言葉に代わる喃語はでているか

出ている	85
少し出ている	72
ほとんど出ていない	29
無回答	57



### 〔A-4〕指さしは出ているか

出ている	70
少し出ている	43
ほとんど出ていない	45
無回答	85

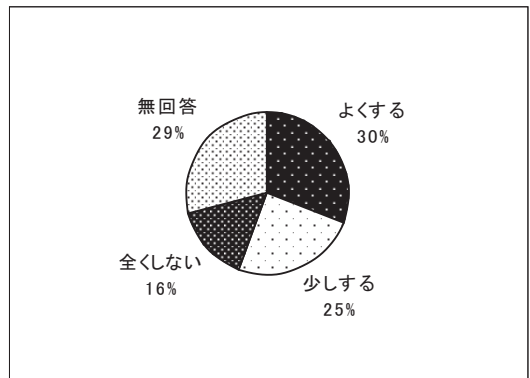


子どもが自分の内面を顕著に伝えるもの、まずそれは、表情である。表情は人と響きあう最強のシグナルである。表情をはじめとする「あまり笑わない子ども」のコミュニケーションのシグナルの表しについて（視線の共有、喃語、指さし）の項目を作った。

### 〔B-1〕その子が1歳半～2歳半位の年齢に達している場合

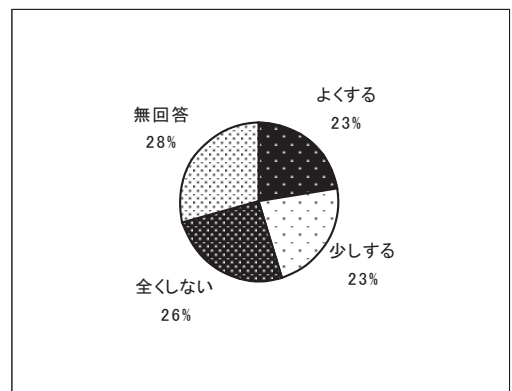
気に入らない事があると怒ったり、泣いたり、「イヤ」「ダメ」という拒否のこぼを發し、自己主張するか

よくする	75
少しする	60
全くしない	38
無回答	70



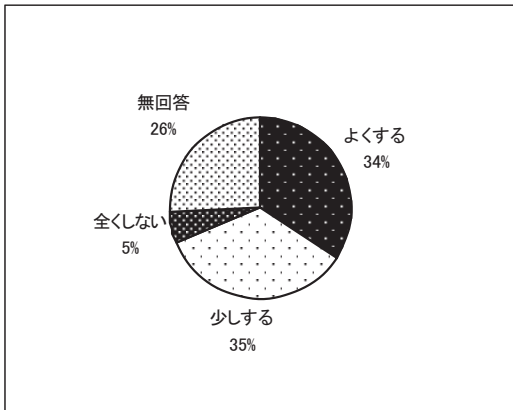
### 〔B-2〕その子の気に入ったもの、好きな場所などに固執し「自分の」と抱え込んだり欲張ったりするか

よくする	55
少しする	55
全くしない	62
無回答	71



〔B-3〕自分の名前を呼ばれると手を挙げたり、振り向いたり、自分が誰であるかわかっている反応をするか

よくする	83
少しする	84
全くしない	13



※ B-1～3の質問に対して無回答が多いのは、質問内容が1歳半～2歳半位の子どもの対象にしているためである。

## VI 結果と考察

ア) 表情笑いはあるが、笑い声が出ない子どもについて

「笑わない子ども」の中にsmileは見られるが、声をたてて笑うこと (laughter) がない子どもが48%いることは驚くべきことであった。「笑いは、情動の表出で言語的な行為ではないという先入観があり、声をたてて笑うことが子どもにとってたいせつな発語訓練の一環であること」が正高信男氏の研究で明らかになっている。乳児の首のすわりが、笑い声がでるようになる条件であり、発声力 (喃語) を促すためにも、たくさん声を出して笑うことが重要である。

(保護者を対象にしたアンケートでは、生後3～5ヶ月頃、声をたてて笑ったか?などの設問を細かく行っている。喃語の出方とlaughterの相関についての報告も次回に行く) 家庭でも保育所でも子どもが泣いた時には、対応せざるをえないため、世話をするが、おはしゃぎ遊びなどして大人も子どもも声を出して笑いあうようなゆとりが、

生活になくなっていることがその要因であろう。

イ) 笑いを引き起こすものは「目」

笑わない子の中に、目を見て話しかけても「全く見ない (9%)」「ちょっと見るがすぐ視線を移す」が50%いた。

生れたばかりの乳児が、特に注意を払うのが人の顔であり、とりわけ目に注目することは周知の通りである。〔目は感情の窓〕、見つめあいによって相手と感情交流し笑いが生ずる。すなわち笑いを引き起こすものが「目」であり、さらに見つめ合いから共同注視 (共鳴しあう) という関係が育っていく。やがて自分の見たものを、大好きな人にも一緒に見てほしい、『驚きや喜びを分かちあいたい』という気持ちが強まり、人と気持ちを響きあい伝えあうというコミュニケーションが発達する。

今回、笑いの弱い子に視線の共有が不十分であることが明らかになった。これは、笑いを回復するには何から始めたらよいかを考える示唆でもあると思う。

保育所においては、ことに養護の大切さを心して関わることではないか。3歳未満児の生活に於いては、世話 (養護) に費やす時間はかなり多い。おむつを換えたり、授乳をしたり、これらの世話をする時こそ、一人ひとりの乳児と触れあえる大切なコミュニケーションの機会である。その時を毎日、どれほど気持ちをこめ、あやしたり、ふざけたり、楽しんでいくかにかかっていると思う。

乳児の待機児が多く、定員の25%増入所している多くの保育園にあって、保育者の疲労感や困難さは想像以上のものがある。がまずは日常的に行う養護を通して乳児への人への信頼感 (自己信頼や他者信頼) や人と一緒にいる喜びを育むことが重要であると思う。

家庭においては、親と一緒に過ごすことより、ビデオやテレビが中心になってしまうありようが深刻である。(保護者を対象にしたアンケートでは、いつからテレビを見せていたか? 1日平均何時間テレビやビデオを見せているか、などの設問をしている。テレビ視聴の長い子と笑いの少ない子の相関は次回に報告する)

ウ)「あまり笑わない子ども」と自我の育ちの関係  
歩行の開始や一語文の獲得に伴い、順調に発達すると一歳半頃を境に、子どもの自我がめばえ、自己主張がはじまる。初めて立ち上がった時の嬉しそうな笑い、大好きな大人に「バイバイ」をしながら、ひとりで自分の行きたい所に行ける喜びを、満面にたたえた笑い（行動獲得の笑い）が多くなる。

また周囲の物を自分の思い通りに操作できたとき、意外にも形が変化したなど発見や驚きを伴った笑い（興味が満たされた時の笑い）も増えてくる。『自分は自分の思い通りに行動できる』『自分はこんなこともやれる』『こんなことをやっていると楽しい』という主観的自我の育ちが、笑いやしぐさ、歓声で表現される。また、この時期の子どもの笑いを観察していると、笑いながらそばにいる大人の顔を見、大人がそれに答えると笑いが一層大きくなる。すなわち「大好きな人と自分の喜びを分かち持つ笑い」に広がっていく。指差しによる大人との共同注視も同様である。信頼できる人とは、同じものを見つめあい、心を通い合えるという親愛関係が築かれていく。大人と子どものそのような関係が成立すると、子どもはやがて信頼できる大人に対して、「いや」「だめ」という拒否の言葉を発するようになる。もう赤ちゃんじゃないんだから、大人の言うなりには行動したくない＜自分＞を主張せずにはいられないという訴えである。自分が大好きな母親とは違う人間であること、すなわち自分が誰であるかがわかってくることも、自我のめざめに拍車をかける。

そこで、あまり笑わないと思われる子どもの自我のめばえについて調査した結果が（B-1～3）である。どの項目についても自己主張が弱い（少しする）と（全くしない）子どもの割合は、40パーセントになっている。（無回答を除けば55%～60%になる）

子どもの豊かな笑いが、自我のめばえの温床である。

## Ⅶ あまり笑わない子どもの実態調査 その結果と考察

今回の研究調査の難点は、「アンケート作成」であった。初語を発した時期をききのがした。質

問項目を多岐にわたって作成したため、却って視点が絞りにくくなったことも考えられる。次回は保護者のアンケートから、研究調査のテーマ展開を行う。